終末ロデオドライブ

きしかわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終末ロデオドライブ

【Ｎコード】
Ｎ０２６５Ｕ

【作者名】
きしかわ

【あらすじ】
１９９９年、突如として現れた魔物たちに蹂躙された世界は、同時に現れた機械人形により救われた。それから１０年。未だに現れる魔物と、機械人形を駆る少年少女との戦いは続いていた――。
ロボ物です。大体主人公が無双します。
神話などの要素が盛り込まれています。残酷な描写もありますので、そういった表現が苦手な方はご遠慮下さい。

序章

１９９９年。

世紀末を前にして、爆発的に広がり始めたコンピュータウイルス――。
後に「予言」といわれるウイルスに感染したパソコンを起動すると、ほんの数秒だけ画面が真っ白になり、ある一文が表示される。

「もうすぐ世界が滅びる」

感染力が非常に強いとされた「予言」だが、それ以外に実害はなかった。

「悪魔がやってくる」

さらにこの一文が追加されたのが、１９９９年の夏。
この頃から、世界各地で子供の行方不明事件が相次ぎ始める。
それは全く手がかりも前兆も見せずの失踪。
神隠しという表現がしっくりくるような、まるで突然立ち消えたかのような……。

「子供たちは選ばれた」

１９９９年、１１月１日。「予言」に新たな一文が加わった。
「予言」は事件に乗じた悪質な悪戯目的のウイルスと世間で騒がれ

るようになった、のだが。
この日を境に、今まで行方不明になっていた子供たちが次々と発見された。
行方不明になっていた子供たちは何も覚えておらず――しかし、口を揃えてこう言った。

「もうすぐ世界が滅びる。悪魔がやってくる。」

１９９９年、１１月３０日。次の一文が「予言」に表示されるようになった。

「もうすぐだよ」

１９９９年１２月３日。

その日、世界に終末が訪れた。

それらは空でもなく海でも、まして宇宙からですらない何処からか、当時の一切のレーダー機器に掛かることなく唐突に現れた。
それも、狙い澄ましたように世界各国の主要都市周辺に。
一つ所に数百という単位で現れたそれは、黒い皮膚と鋭利な爪を３メートル程の身体に備え、ヤギのような頭をした人型の異形。
誰かが、言った。
あれは、悪魔だ。
世界の滅びがやってきた。

これは、終末の始まりだ。

出現と同時に悪魔たちは都市に殺到し、建物や人に関わらず、彼らの目に映る全てに対して襲撃を始めた。
なにも難しいことはない。
ただ、その身体を駆使しての殴る、蹴る、切り裂くといった単純なものであった。
しかし異形の彼らの攻撃は、凄まじい膂力でもって難なく電柱を折り、壁を穿ち、人など容易く切り裂いた。

世界は恐れ慄くと同時に、彼らに対して反撃を開始した。
当初こそ大きな被害を出した悪魔達との戦闘だったが、科学の集大成である軍事兵器の過分な破壊力によって悪魔は徐々に駆逐されていった。
悪魔は絶命するとドロドロと溶け始め、最後には地面に黒い染みを残すだけとなる不可思議な生命体であった。
また、知能もあまり高くないらしく、精々が野生の獣程度と推測された。
その実、数日を経過した頃には各地での悪魔の殲滅はほぼ完了しており、その捕獲にまで成功してすらいた。

そのため、人類は悪魔達を『ありえないもの』とは認識したものの、世界を滅ぼすことなど出来得る存在ではないと確信した。

――あながち、その考えでは間違ってはいなかった。
その時点では、という部分を除いては、だが。

誤算があったのだ。認識が足りなかったのだ。

それは。

最初にあらわれたそれらは、ほんの前触れに過ぎなかったということだった。

１２月１８日夜、ソレは姿を現した。
地面を割り、蠢きながら天に向かって急激に成長したソレは、蔓が幾重にも絡んだような姿の漆黒の大樹。
後にユグドラシルと呼ばれるソレらは、全長４００メートル強まで５分とかからず達すると、次に枝葉を伸ばし始めた。
見る見る内にそれらは黒く大きな花を咲かせ、次々に実をつけていった。
――そう、悪魔を実らせたのだ。
果実を裂き現れた悪魔達は、大部分が前回現れたものと同じ姿をしていたが、中には他より一回り大きく、翼を持ち空を飛ぶ新種の悪魔が混じっていた。

そして悪魔は再び攻撃を仕掛けてきた。
ユグドラシルという異形の出現に警戒態勢を布いていた各国の軍隊は、一斉に攻撃を開始した。

そこで、人類は絶望に見舞われた。

今まで個々別々に暴れまわっていた悪魔達が連携の取れた行動でもって軍隊へと襲いかかり、次々と部隊を撃破、侵攻してきた。

そしてなにより、兵器が悪魔に対し何ら効果を持たなくなっていたのだ。
銃から放たれた弾丸は弾かれ。
今まで悪魔を一撃のもとに焼き払っていたグレネードや爆弾の類は爆風さえ届かず。
人の掲げるロザリオさえも、信仰心を白濁させるだけのものになっていた。

――ＡＷ（アンチ・ウエポン）スキン。
絶対領域のすべを持った悪魔達が、軍事兵器のことごとくを退けてしまったのだ。
当時、全く未知の物だったＡＷスキンに対抗する方法を人類は持たず、悪魔達との戦局は劣勢を強いられた。
空を飛ぶ悪魔に翻弄され、浮足立ったところを地面を駆けてきた悪魔の群れに壊滅的な打撃を被り、前線は早々に壊滅。
後退し、慌てて防衛線を敷こうとした時には、ユグドラシルから翼を持った悪魔が空を黒く埋めつくす勢いで都市へと飛来し、人々へと牙を向けた。

悪夢そのものだった。
街中から悲鳴が聞こえた。街そのものが悲鳴を上げているようでさえあった。
街は体中の至る所を切り裂かれ、食い破られた人の死体で埋め尽くされ、赤く染まっていた。
逃げまどう人々は混乱し、ただただ生き延びることに必死だった。

この日のうちに、いくつかの国が機能を果たさなくなった。
国が、滅びたのだ。

１２月２３日。
悪魔によって次々と国が滅びていく中、いくつかの核保有国が自国内における核兵器の使用を決定した。
すでに死地と化したかつての首都――自国の発展の象徴ともいえる都市への使用を。
が、それは結局叶わなかった。
最後の手段として講じられたそれは、思わぬ形で足止めを食らったのだ。

――コンピュータウイルス「予言」。
ひっそりと各国の防衛中枢のコンピュータにまで潜り込んでいた「予言」が、各国の軍事ネットワークを食い破り始めたのだ。
「予言」の破壊活動はそれだけに留まらず、一般の回線を通して全世界の一般のネットワークへもクラッキングを仕掛け、
瞬く間に広まったそれらを、悪魔への対応に追われていた政府は防ぐことが出来ず――
この日、当時におけるネットワークは完全に崩壊した。

１２月２４日。
悪魔達は着々と世界を踏み荒らしていった。
もはや人類に打つ術はなく、ただ終焉を待つばかりだった。
人々は、空を見上げた。
星空はそこには無く、翼を持った悪魔が飛び交うのみ。

やがて、人類史の転機となる日が訪れる。

１２月２５日、１１時２５分。日本、東京。

ユグドラシルが聳え立つ東京湾に、新たな存在が現れた。
ひたすらに抵抗を続けていた自衛軍は疲弊しきり、生き残った住民を守ることに手一杯で、彼らが東京湾に降り立つまで気づくことが無かった。

黒い悪魔達とは全く違う姿をした彼らは、僅か3体。

1体は白銀の西洋甲冑のような装甲板に身を包んだ輝く騎士。
一番初めに姿を現した白銀の騎士は、今にも自衛軍の建造したバリケードを打ち崩さんとしていた悪魔の集団に飛び込むと、腰から引き抜いた細身の剣を一閃させた。
それだけで悪魔達の胴体は静かに割れ、次々と消滅していく。

1体は透き通った青の鋭角的な装甲を持ち、紫色の煌めきを帯びた長銃を構えた騎士。
青色の騎士は、自衛軍の前へと踊り出ると同時に抱えていた長銃を空へと向けた。
そこから放たれるのは、正に流星。
あるものは直線を、あるものは曲線を描くそれらは空を跋扈していた悪魔達へと降り注ぎ、悪魔を黒い炭へと変えていく。

そして残る1体は、正に異形。

突然現れた2体の騎士に呆気に取られていた人々の前を、ユグドラシルに向かって一直線に駆けていく影があった。

――「鬼」。

赤黒い装甲は、むしろ血を浴びたかのように艶めかしい光沢を放ち。
他の2体より一回り大きな体躯に、さらに自分の全長の倍もあるだろう大剣を携え。
頭部には野太刀が突き刺さったかのような角を持ち。
顔の部分は黒く塗りつぶされたかのように鈍く光り。
そのくせ眼はギラギラと金色の光を放っていた。

「鬼」を先頭として、彼らはユグドラシルに真っ向から挑みかかった。
彼らの放つ光はＡＷスキンを貫通し、振るう剣は悪魔を紙のように切って捨てた。

「鬼」が、ユグドラシルの根元近くにあった銀色の核を打ち壊した時、東京は光に包まれた。

光が過ぎ去り人々が瞼を開けると、悪魔達は沈黙して動かず、絶望の象徴であったユグドラシルは姿を消していた。

同日。
世界各地のユグドラシルの元へ現れた騎士達の活躍によって、ユグドラシルと悪魔達は駆逐されていった。
人類は終末を逃れたのだ。
それを皆は喜ぶとともに、あの騎士達は何だったのかと騒ぎ出す。

１２月３１日。
日本のとある科学者が名乗りを上げた。
『世界を救った機械人形――エンゼルドレス。それが彼らの名前です。
扱えるのは――エンゼルドレスに選ばれた子供たち、だけ』
名をアラガネと名乗った彼の言葉が世界へと広まるのに、そう時間はいらなかった。

以後、エンゼルドレスが「ＡＤ」の略称で呼ばれるようになると、対して悪魔達は「魔物（デーモン）」と呼ばれるようになる。
また、それからも魔物は散発的に姿を現してはＡＤと激しい戦いを繰り広ることとなる。

――これが、俺たち人間と悪魔達の失楽園の始まりだった。

1話

どうも機体が安定しない。
頭上で回っているだろう輸送機のプロペラも、心なしか頼りない呼吸を続けている気がする。
お世辞にもあまり上質とは言えない輸送機の座席シートは、ゴツゴツとして待遇が悪い。
これが自衛軍の最新鋭の輸送機というのが信じがたい。
ヒュンヒュンというプロペラ音が耳障りだ。静音性は考慮の外だったのだろうか。
これが今日、明日と続くというのだから憂鬱だ。
こてん、と硬いシートに首をもたげる。
安っぽい割りに耐水性に優れていそうな合成皮が、長い黒髪に摩擦を効かせることが出来ず、
頭はずりずりとずれ落ちていく。
「……はあ」
小さく溜息をつく。
ストレスは溜まる一方だ。眉間に皺が寄るのも仕方ない。

「あー、溜息なんてついてると幸せが逃げるんだよぉ、ルナ」

「座り心地が悪い。音がうるさい。実用性ばっかり重視する自衛軍はこれだから嫌いよ」

「極秘に行われる輸送任務なんだから仕方ないんじゃないかなあ？
奥羽社の機体なんて使ったらモロバレだしー。
私なんか、シートに座らせてもらえるかさえ心配だったんだからぁ。

まだ良い方だと思うよー」

「……そうね、それは了解済み」

対面に座る少女がにこにこしながら話しかけてくる。
キラハ・ボルドウィン。旧米国出身で、現在は私と同じ組織に所属している。
ウェーブがかったブロンドがトレードマークで、性格は温厚。というかノロマ。

眩しい金色の繊維が、窓からの夕日に照らされてほわほわと光を放つ。
コイツ、また私の顔を眺めてたんだな、とルナは考える。
キラハはおっとりしている割に妙に観察眼が鋭かったりする。
胸も多分、私よりある。……馬鹿馬鹿しい。

「でもでも、今から取りに行く積荷って何だろうねー？
AD機甲者を二人も配置して、その上で自衛軍の輸送機で偽装――
うーん、陰謀の香りがするね！」

「うるさい。任務中。私語厳禁。黙れウスノロ」

「……自分だってさっき喋ってたよねー」

「その口、ホチキスで止められたいの？」

「う……うぇぇん！！」

キラハの瞳が見る見るうちに潤み、ボロボロと涙が落ちていく。絶対嘘泣き。

この子と組んで早いもので2年。行動パターンの予測は用意に立つ。
泣いたからってどうってことはない。
どうってことはないけれど。
「……ふぇ？」
「――――拭けば？」
ハンカチくらいは、貸してあげようと思う。
嘘泣きでも、別にいい。
「ありがとぉー、ルナ！やっぱりルナは優しいねぇ」
「いいからさっさと拭きなさい」
だって、親友なんだ。
優しくだって、したくなる。
ツン、とキラハから顔を背ける。
「あ、ルナってば恥ずかしがってるぅ」
「うるさい」
顔を赤らめてそっぽを向くルナを、キラハがからかう。
その光景は、両者が着込んでいる薄手のボディスーツのせいだろうか、どこか奇妙だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　冬も近い秋の空はどこまでも高く透き通り、天の底まで風が吹き込んでいる。
乾いた風が吹き、枯葉がくるりくるり、人気の無い廃墟街を転がる。
その中を、久住　拓人はハンドガンを携え――路地裏を進んでいた。
ずりずり、がりがり。
衣服が僅かにビルの壁面に擦れ、独特なノイズを奏でる。
この音でさえ、敵に気付かれれば命取りなのだが、すでに標的の場所は把握している。
こちらは一人、向こうは５人からなる小部隊だが、襲ってくれば好都合。カウンターで排除してやる。

がちゃ……ん

近くでマガジンを装填した音が聞こえた。
間違いなく近くにヤツらは居る。
それも次の襲撃で俺を葬る気だろう。リロードしたのがいい証拠だ。
お互いに拳銃は同種。別に打ち合わせたわけではない。

「うぉおおおおお！！」

前方の物陰から飛び出してきた男が、怒号をあげながらトリガーを絞ってきた。
射線は既に拓人を捉えている。

ぱん！ぱん！

二発の銃弾が前方を伺っていた拓人の頬をかすめる。
切れ上がった双眸が風圧を追う。弾の矛先は完全に外れた。
枯葉のようにとはいかないまでも鮮やかにそれを転がってかわし、
拓人は狙いを標的の額につけた。
軌跡がひゅうと風鳴りする。

男がもう一発、追加して放ってきた。
刹那、拓人は大きく飛び上がり男に向かって突っ込んでいく。
直進してくるとは考えていなかったのだろう。
男は一瞬だけ、加速した拓人を見失う。

それが命運を分けた。

トリガーを、引いた。

ハンマーが弾け、撃たれた男が仰向けに倒れる。

（まずは一人・・・・・・！）

仲間の奇襲が失敗したのに慌てたのか、更に二人が物陰から躍り出てくる。
内一人は長方形の金属の板を携えていた。銃弾防護用の防弾シールドである。
シールドを構えた一人が前を走り、もう一人が姿勢を低くし後ろに続く。
銃撃から身を守りつつ、シールドの影からこちらを仕留めようとい

う考えなのだろう。
確かにああされては正面切って撃ち合いをするのには分が悪い――
が。

「甘い！」

拓人は強く右足で地面を蹴飛ばし、踏み切った。
体が地面から浮き上がり、前方へ向かう推力を得る。
同時に一発、敵へ向け射撃を行う。

チュン！と乾いた音がして、銃弾はシールドを構えた相手の足元に着弾する。
シールドに着弾することは覚悟していても、足元にまでは注意を払っていなかった敵は驚いて

速度を下げる。
すると当然、後ろを走っていた敵は目の前で急にスピードを下げたした味方に正面衝突をすることになり――

「！？」
「うおっ！！」

それぞれ声を上げ、見事に転倒。
絡まるように折り重なったそれは格好の餌食である。

ぱん！ぱん！

必死に立ち上がろうとする彼らに向け、拓人はトリガーを引く。
見事命中した銃弾が、敵を沈黙させた。
そして拓人は倒れた敵からシールドをもぎ取り、即座に前方に構え

る。

ガッ！

間をおかず、シールドに着弾。重い衝撃が腕に伝わる。

（やはりこいつらは陽動か……！）

と、思うのも一瞬。拓人は目の端に光るものを捉えた。
それは向かいにあるビルの屋上でこちらを覗き込んでいる――狙撃手。

狙撃銃を構えた敵は、こちらにピタリと照準を合わせていた。
どうやら、これが向こうの作戦だったらしい。
その狙いは成功だ。拓人は今、シールド以外に身を守る術がない。
加えて、こちらが狙撃手に気を取られているならば、相手側の残る一人は恐らく……。

「シッ！！」

呼気一つ。シールドを片手に持ち替え、もう一方の手で背後に向け銃を撃つ。
銃声が響くと共に、後方で何者かが飛び退く気配がある。
先ほどの二人を囮とし、前方の狙撃手と背後から一人で挟撃を行う。
これが敵の策。拓人はその策中にまんまと嵌った形になったのを知った。

だが。

（それも予想通り）

慌てることなく、腰のベルトに吊り下げてあった円柱形のモノを手に取る。
スモーク・グレネードだ。
ピンを引き抜き、前方へと投じる。
小さな爆発音と共に濛々と白い煙を吐き出したそれによって、周囲は一面のスモークに巻かれる。
そしてゆっくりと音を立てぬよう、拓人は横に動いた。

チュン！

今まで拓人が居た場所を銃弾が撃ち抜く。
その弾道が描くスモークの微細な射線を、拓人は見逃さなかった。
そこから狙撃手の居場所に当たりをつけ、シールドを手放しトリガーを引く。

ハンドガンから放たれた銃弾は、視界を埋め尽くす白いスモークをくるくると巻き込みながら、一直線に前方やや上方へ向かっていく。
そしてスモークの漂っている空間から抜け出したそれは、姿を現した僅かな時間、飛行機雲のようにスモークを従え――

「よし！」

狙撃手へと命中した。
カラン。
聞こえてきた狙撃銃がビルの屋上から落下する音がそれを教えてくれる。
ただし、バタバタと足音も聞こえてきた。どうやら当たりはしたが致命傷にはならなかったらしい。

ハンドガンの射程距離を考えると上等だろう。
けれど、成果は十分だ。狙撃手を無効化したのなら、気を配るべきは背後からこちらへ向かっ来ているだろう一人のみ。

視界の利かないこの状況で、取るべきは恐らく接近戦。
予想が確かなら、相手は既にこちらに近づいている。
じり、と地面を踏みしめ振り返る。

スモークが立ち込めているために、視界は不良。
ならば頼りになるのは聴覚。
相手の靴底が砂利を噛む音。擦れる衣服の音。果ては呼吸の音まで聞き逃さないよう、耳を澄ませる。
恐らくは相手も同様の考え。然るに先手を読みきれなかった側が地に伏すことになる。

一陣の秋風がゆらりとスモークを連れ去っていく。
双方に動きはない。
拓人は待つ。
スモーク・グレネードの炸裂前に相手はこちらを視認している筈。
対して此方は相手の居場所を特定できていない不利を抱えている。
故に仕掛けることはままならず、張り詰めた緊張感の元、相手の出方を待つ。

時間が過ぎていく。
停滞していたスモークも、徐々に薄まり、空が見えた。

バタバタバタ……。
先ほど狙撃手の居たビルの方から足音が聞こえる。
どうやら狙撃手も此方へ向かって来ているらしい。音のする距離か

らするに、接敵にはもうしばらくかかるだろう――。

ひゅっ。

それを合図としたか、空気を断ち切り、黒い刀身を持ったナイフがスモークの隙間から差し込まれてくる。

こちらの喉元を狙う突き。

拓人はそれを銃のグリップで横から殴りつけた。

相手の体勢が左へと崩れる。

好機と見て、続けざまに肘打ちを放つ――が、そこで気づいた。

ぐらりと傾いた相手が、やや右前傾に体を倒している。

肩を前に押し出して、だ。

肘打ちが相手の肩に弾かれ、次いでそのまま腹部へと重い衝撃がのしかかってくる。

ショルダー・タックル。

相手の手元を見やれば、弾いたはずのナイフが構え直されている。

（いや、違う……！）

先ほど相手がナイフを持っていたのは左手。右手に握りこまれたそれは、拓人に初撃が防がれたと見るや、

新たにホルスターから抜きとり構えたものだろう。

ご丁寧に左手で尻柄を押さえ込み、全体重をナイフに掛けられるようにしてある。

このまま押し倒されれば、その刃が体に差し込まれることは想像に難くない。

どうやら相手は最初の一撃が失敗することは織り込み済みだったらしい。

でなければ、こうまでスムーズに行動を取れるとは思えない。

油断ならない相手だ――！

此方はすでに後ろへと倒れ始めている。今更踏ん張ることも出来ない。
してやったり、と相手が笑みを浮かべるのが見えた。
倒れるのは必至。ならば。

「ッ……！？」

相手の笑みが消える。
拓人は倒れ行くまま、相手の襟首を掴み、腹部へと足を真っ直ぐに伸ばし、

「せえええええいッ！」

敢えて自分から背後へ勢い良く倒れこみ、背中と地面の接地部を機転として、相手を投げ飛ばした。
柔道で言う巴投げ。
意表を突かれた相手は、為す術なくアスファルトに打ち付けられる。
間隙をおかず拓人は立ち上がり、地面に叩き付けられた衝撃でパニックになる相手の目前へと銃を突きつける。

「武器を捨てろ。降参するなら両手を頭の後ろで組んで目を閉じろ」

敵は至近距離にある銃口を見つめ何度か瞬きを繰り返した後、
諦めた様に溜息をつくと、ホルスターのハンドガンを遠くに投げ捨て、降参のポーズを取った。

これで残るはあと一人。狙撃手を残すのみ。

ビルの方を向くと、全力で此方から遠ざかる者がいる。

もはや一目散といった様子で逃げ去っていくその姿に嘆息しつつ、拓人はトリガーを引く。

ぱん！

此方を振り返ろうともせずに掛けていく男の後頭部に、銃弾が寸分違わず命中する。

男の膝は力を失い、ぐったりと地べたに倒れこみ、染み出した液体が彼の服を汚した。

「やることがいちいち間抜けなんだよ」

拓人は疲れたように言い放った。口元には呆れたような笑みさえ浮かべていた。

2話

びーびーびー……

サイレンが街中に鳴り響いた。彼しか立つ者が居ない殺風景な街に、それは空しく無機質に広がる。
と、撃たれた狙撃手がむくりと起き上がった。

「また拓人のチームの勝ちかよう……。これで5連敗か。編入生ってのは伊達じゃねえのな。どーにも才能の差ってのはなあ」

「馬鹿言ってるんじゃない、お前らが負けるのはリーダーのお前が毎回敵前逃亡かますからじゃないか。
それに今回は1対5のハンディマッチ。こんなんじゃ勝ち負け以前の問題で」

「あーだこーだ言うなって。だってホレ、ペイント弾だってなぁ、当たれば痛ーんだ。俺様は痛いの嫌いなんだよ。
それに体術でお前に勝てるかっつーのよ」

顔にベットリと付着した塗料を迷彩服で擦りながら、大柄な男が言った。
このガタイの割りにビビリな男こそ、今回の訓練での対戦チームのリーダー、牧伏である。
そして拓人のチームリーダーは拓人、つまり生き残り勝利を治めたのは拓人のチームだ。

「まあ、これで今日の課程は修了だな。ああ、晩飯が待ち遠しいよ」

牧伏はがはは、と大声で笑った。負けず劣らず彼の腹もぐるる、と鳴いていた。

彼らが通う教育施設は、私立の高校で名を暁学園といった。
しかし、その趣は１９９９年以前の頃とは異なり、生徒に軍事行為の講習を行うようになっている。
これも、１９９９年に襲来した悪魔――魔物（デーモン）の影響だ。
人々は最低限の防衛手段を心得、実行に移し、身を守れるようになるべきである。
これが魔物襲来後に再結成された日本政府の意向であった。
そのため現在では国内の主な教育施設で、次代を担う子供達に己を守る術を覚えさせるため、このような訓練が義務付けられている。
それが役に立つかどうかは別として、だ。
これが多々、子供が軍事行為の一端に触れる事を快く思わない政治家に批判されたりもするのだが、
やはり人類の未来の為、という旗は強く揺るぐ事がない。

そしてなによりも、ＡＤの存在である。
ＡＤを操ることが出来る人間が、現時点では未成年の子供のみなのだ。
１９９９年に起こった悪魔出現事件――今ではラグナロクと呼ばれている――の後、アラガネが提唱したＡＤ理論によると、
ＡＤとは大きく分けて２つの要素を保有している。
「脳」と「身体機甲」。
「身体機甲」とは言わずもがな、ＡＤ機甲者の搭乗する機体を指す。
機体のスペック自体が当時の技術では実現不可能とされていたレベルを有しており、
この時点で科学者としてのアラガネの才能を見せ付けることになっ

たのだが、
アラガネのＡＤ理論の着眼点は更に斜め上を行くものだった。
それが「脳」。
普通、機体の制御には人工知能を使おうとするところなのだが、
人が普通に行っている身体動作、「歩く」、「走る」、「掴む」と
いった行動を人工知能に行わせようとすると、
膨大な計算が生じるため、人と同じ程度で行うのは技術的難題を抱
えていた。
そこでアラガネは考えたのだ。
『人の動作を求めるのなら、人がそれを行えばいい』
つまりは人工知能ではなく、人――搭乗者の脳を制御系等の要にし
ようという理論。
夢物語とさえ言われかねない考えだが、実際それをアラガネはやっ
てのけた。
――ナノマシンによるＡＤと搭乗者のシンクロ。
搭乗者にナノマシンを注入することによりＡＤへの情報伝達を可能
とする技術。
ただしこれには搭乗者側にある要素が求められた。
脳の発達過程にある子供のみが適合可能――。
このナノマシンは普段人間の必要としない、いわゆる潜在能力領域
を使用してＡＤへとのリンクを行う。
人間の脳というのは成長するにつれ完成していくため、ある程度以
上の年齢を重ねてしまうと、

リンクに必要な容量を使用することは非常に難しくなってしまうのだ。
当然、成年以上の者であっても多少ＡＤを動かすことは出来るのだが、
それはあくまで「多少」という枠内に収まる。
子供のときにナノマシンによる領域開発を行った成人と、そうでない成人。
両者を比べるとウサギとカメほどの違いが生じる。

加えて、このナノマシンは更に人を選ぶ。
同年代の子供であっても、ナノマシンの適合率に違いが生じてくるのだ。
これは脳の発育過程におけるシナプスサーキットの構成によるものとされているが、正確なところまでは未だ解明されていない。
この適合率の高低により、ＡＤとのリンクのスムーズさに差が生じる。
魔物戦に耐えうる適合率の高さを持つ者は「機甲者」（ポーン）と言われ、それに一歩届かない者と区別される。

そして、ナノマシンの特異さはそれだけではない。
もともと低い確率でしか存在しないＡＤを操縦するに足るレベルを有する「機甲者」だが、
ごく稀にナノマシンとの通常考えられない親和性を見せる者が存在する。
それが「騎甲者」（ナイト）。
現に世界各地の有名な騎甲者は一般の機甲者とは比較にならない適合率を誇り、その活躍は目を見張るものがある。
加えて騎甲者にはアビリティと言われる特殊兵装が搭載された専用機が用意されることが一般的であり、これが殊更に彼らの戦闘能力に磨きをかけている。

アラガネはこんな事も言っている。
「人は進化する時機なのですよ。ラグラロクは言わば転機。機械文明に対する神の警告なのやも知れません。
だってほら、ＡＤは直に人によって動かされるものです。ＡＷスキンを突破できたのはＡＤのみ。
これは神が『人の意思』ってモノを試しているのではないですかね？」

私だってＡＷスキンを何故突破出来るのかは分かりかねますし――今後の研究課題です――。
などと国連会場で宣い世界中の代表者から非難を浴びたアラガネは、しかし続けてこう言った。

「けれども、けれどもですよ。現状においてＡＤ無しに悪魔たちから身を守れると胸を張って言えますか？
守れないでしょう。守れないですよね。守れるものですか。
ですから私たち大人は、非道な決断をせねばなりません。告げなければなりません。
子供たちに！まだ幼い彼らに！次代を担う君たちに！世界を託すのだと！」

日本に限っても、魔物は月に2、3のペースで各地に現れている。
魔物によって人が襲われるなんて話は、今では珍しくない。
魔物の研究も進み、彼らが一定の場所にしか出現しない事、
個々のＡＷスキンにも差異があることなどが判明している。
――ＡＤに頼りきりな状態に、変わりはないのだけれど。

西日が拓人達の学び舎を朱色に染め出している。
建物全体を表から隠してしまう高い外壁さえ、レンガの質感に色が乗り美しく見えてしまう。
ただでさえ真っ白な校舎にだだっ広い敷地が相乗し、外界とは別世界のここに夕焼けなど加われば――
案の定、景観は見事なほど日本離れ、というより異世界質だった。

この学園は、他の教育施設とは一線を画していた。
校門を始めとして、高い外壁に囲まれる敷地からには出る場所には必ず詰め所があり、そこには２４時間体制で警備員が待機し、人の出入りを確認している。
また、軍のＡＤ関連施設も学園内に存在している。
訓練施設についても、その一通りが最新鋭の物で統一されている。
校舎も多分に費用をかけて作られており、魔物の襲撃にも耐えうる。
レンガ造りかと思われる外壁は、ＡＤの装甲にも使用されている新合金が埋め込んであり、
対戦車ミサイルの直撃にもヒビひとつ入らない。
敷地面積も、一つの町を丸々飲み込んだかのように広大なもの。
そもそも対人訓練用の擬似市街地を始め、ＡＤ訓練用・研究施設の数々が立ち並ぶその威容は小さな町といっても過言ではない。
それが２０１０年現在の復興された東京都の近くに有るというのだから、その規模の大きさは計り知れない。
この学校には、日本中のＡＤ適正の高い者や、各教育施設での軍事訓練で上位の成績を出した者達が集められる。

要するに、機甲者・軍人養成のエリート校なのだ。

収集された生徒がそれらになりたいかどうかなんてのは、関係無い。
無論、志願して入学してくる者もかなりの数でいる。

ＡＤ騎甲者になりたいがための能力開発のための志願を始めとし、
ＡＤ適正こそないものの家が軍の中でも高位を占めるような名家であったり、
空軍のパイロット志望であったりと、理由こそ多々有れ、様々な方面で活躍できるようになりたいという者は数え切れない。
つまり、そんな高い理想を持って入学してくる者達の中に混じって学徒を続けている、

集められた者達はある意味『天才』と称されてもいいような人材ばかりなのである。

しかし、この養成学校においても生徒達を私生活にわたって拘束したりはせず、あくまで自由に暮らさせている。
学校を出て五分も歩けばコンビニも書店もゲームセンターも駅も、大抵の施設は揃っており――学校の敷地を出るのに要する時間を考えなければだが――生徒たち若者に閉鎖感は無い。

そう、こうなるように作られた場所なのだ、ここは。

それが、この時代のこの場所の実態。

其処に、とある事情から去年の春から2年生として編入してきた編入生――それが久住拓人であった。

3話

「さて、帰るか」

「おう。……うお、この評価見ろよオイ。『射撃：正確性　F』だってよ。最低評価なんて最悪だ……絶対コレお前が超回避したせいだろ！」

「俺ばっか狙ってたお前が悪い」

事務局への訓練終了報告をした後、俺と牧伏は寮への帰り道を歩いていた。

訓練場の使用報告などは終了後に報告義務があり、報告と同時に訓練の評価表が渡される。

これは訓練場に備え付けてある多視点カメラによる自動評価で、射撃の正確性や所要時間などをA～Fまでの6段階で評価するものである。

「そういう拓人はどうなんだっつーのよ？ちょっと見せてみろって……よいっと！」

牧伏の手が伸びてきて、拓人の持っていた評価表をパッと奪い去っていく。

「ええとどれどれ。『射撃総合評価：A』『体術総合評価：A』『各項目総合評価：A』……うわあ、腹立つ。
これが俺様を叩きのめして得た評価だと思うとすっげえ腹立つわ……！」

「勝手に人の評価表ぶん盗っておいてそれかよ……」

「しっかしお前、これだけ能力高いのに何で機甲科に行かずに普通科に編入してきたんだか。AD適性だってありそうなもんだがねえ。いっそナノマシン適合テスト受けてみればいいじゃねえか。確か受けてねえんだよな、お前」

「……身体能力とナノマシン適合率は無関係だぜ？んな事言ったらAD適正が有るのは全員がアスリートってことになりかねない」

「それにしたってよう、適合テストくらい受けても損はねえ気がするがなあ」

「……」

「んあ？どうした拓人？」

「……なんでもねえよ。それより、とっとと評価表返しやがれ！」

取り返そうとするも、牧伏は評価表を持った手を高く上げる。
身長で劣る俺の手が届かない位置まで上げると、牧伏は嫌らしい笑みを浮かべた。

「お？おお？これは傑作！天下の拓人さんに俺様が勝っちゃったよ！ホレホレ、取り返してみろーい！」

「小学生かテメーは！いいから寄越せ！」

「欲しけりゃ取ればいいじゃねーのよ。ほーれほーれ」

「2メートル届きそうな大木ヤローが何ぬかしてやがる！そろそろ本気で怒んぞコラ！」

「がーっはっはっは！拓人をからかう優越感、俺様ってばこの上なく気分が――――ほぐぇっ！？」

「あ」

アホ面を下げて大笑していた牧伏の額を、何かが直撃した。
５００ｍｌのペットボトルである。
飛んできただろう方向を振り返ると、そこには憮然とした表情で立つ少女の姿があった。

「道の真ん中で邪魔なことこの上なし、ですわ」

「……相変わらず半端ねえな、亜里沙」

「わたくし、やるからには徹底的にやりますわ。半端って嫌いですの」

亜里沙は倒れ伏した牧伏に近づくと、容赦のない蹴りを見舞った。
どぅふっ、とか聞いた事のない声を牧伏は上げていたが、どうやらイラついていたらしい亜里沙は、追撃を繰り返す。
蹴り、蹴り、蹴り、踏みつけ、踏みつけ、踏みつけ。

「どぅふっ、ぐおっ、あがっ、……ッ！……ぐっ！あおッ！あへっ、えへっ、あへへ、どぅふっ、ドゥフフッ、ドゥフフフ！」

「そこら辺でやめとけ亜里沙。牧伏が何か妙な世界に到ろうとしてるから」

「ふんっ……！目の前の敵から逃げ出す輩にはこれくらいしないと……！良い様ですわ！」

最後に一撃、力をこめて牧伏を踏みつけると、亜里沙はこちらに向き直った。ぎりり、と細められた視線が刺さってきて怖い。
元々かなり整った顔立ちをしているために、「わたくし気分を害していますのよ」というポーズをとられると、
怒りの矛先を向けられている身としては非常に居たたまれない気分になる。
亜里沙の機嫌が悪い理由――ああ、思い当たる節がある。
ついさっきの訓練で思わず巴投げをかけてしまった相手、それが彼女だ。

「さっきは投げ飛ばしてすまん。どこか痛んだりするか？」

「最低限の受身は取りましたので、何てことありませんわ」

「良かった。訓練とはいえ俺のせいで怪我したとなっちゃ悪いもんな」

「怪我も何もあったもんじゃないですわ。久住さん、――貴方、倒れている私に止めをささなかったでしょう。
あの時は動けなかったのですから、わざわざ降参を求めるなんてまどろっこしいことはせずに、

銃で撃つなり何なりしてしまえばよかったではないですの」

「いやまあ、そりゃそうなんだが……まいったな」

痛いところを突かれて、唸ってしまう。
それを見て呆れた顔をすると、亜里沙はさらにこちらに近寄ってきて、俺の胸を小突く。

「それに貴方も分かっていたはずですわ。
後ろから迫って来ていたのが牧伏さんという可哀想な脳の持ち主でなければ、
私を押さえ込んでいる久住さんに銃撃を浴びせるのは確実でしたわよね？」

「う……」

黒江亜里沙――。それが彼女の名前である。
眉目秀麗かつ頭脳明晰。才色兼備という言葉がここまで当て嵌まる人間を他には知らない。
学業は当然のごとく入学から常にトップを誇り、体術といった身体能力面でもかなりの実力を見せる。
これだけなら普通の優等生なのだが、彼女の才覚はそれだけに留まらない。
亜里沙はどこかの教育施設から招集された訳ではなかったのだが、入学に際して行われたナノマシン適合テストで騎甲者級の数値を叩き出したのだ。
以来、彼女には自衛軍がスポンサーとして付き、新型ＡＤのテスターとして選出された。
新型ＡＤのテスターとは、つまりはいずれ自分のものとなる専用機の調整も兼ね、魔物と戦闘する機会を与えられることを意味する。

実際に数度の戦闘経験を得ており、時折学園を欠席するのは対魔物戦へ参加しているがためとのことだ。
学園卒業後には軍への配属が半ば決定しており、その予行という意味合いもあるらしい。

ただ、こんな噂もある。
軍は当初、彼女に「今すぐにでも軍へ入隊を」と打診し、亜里沙自身もそのつもりだった。
しかし、ある時期を境に彼女は断固として卒業までの入隊を拒否した――。そういった風聞。

まあそんなことを考えていても、現状の打破には全く繋がらなかった訳で。
黙り込んだ俺に、亜里沙の説教は続く。

「そもそも貴方は能力はあるくせにいつも何処か抜けていますわ。それでは訓練は良いにせよ、実際に戦場で戦えば気の緩みが原因で命を落としかねません。
わかってらっしゃいます？」

「あー……うん、うん」

「何ですかその返事は！人の話をきちんと聞いてらっしゃいますの！？貴方はそんなだから――！」

……いかん、適当に聞き流していたせいで、また怒りがぶり返してきたらしい。
これ以上怒らせては不味いので、慌てて言い繕う。

「よ、要するに亜里沙は俺の心配をしてくれてるんだろ？ありがと

な、嬉しいよ。優しいよな、お前って」

「――ッ！？ま、まあ分かれば良いんですのよ」

しっかりと目を見て礼を述べる。実際、指摘はもっともだ。
急に感謝されたことに驚いたのだろうか、亜里沙は言いかけていた言葉を飲み込む。

「それとごめんな、手加減したみたいになっちまって。
相手が女の子だとさ、どうしてもなるべく怪我させないようにって気を使うんだよな。亜里沙からの助言、肝に銘じておくよ」

「……人の気も知らないで……」

「ん？何か言ったか？」

「次は本気で来て下さいと言ったのですわ！ほら、こんなところでいつまでもたむろしていては通行の邪魔ですから、さっさと寮に帰りますわよ！」

言うが早いか、亜里沙はさっさと歩き始めてしまった。
どうやら説教タイムは終了だ。地面で悶絶している大男に行くぞ、と声を掛けて亜里沙を追いかける。

こうして俺と亜里沙、牧伏が連れ立って帰るのは珍しくない。
俺と牧伏が普通科、亜里沙が機甲科と属している科は異なるが、行き先はどうせ同じ敷地内に立っている男子寮と女子寮なのだから自然な流れとも言える。
俺が2年の四月後半に編入してきた頃は、寮での同室となった牧伏と二人で通学していたのだが、

五月の連休を目の前に行われた拓人にとって始めての対戦式の小隊訓練で、亜里沙率いるチームに俺の所属チームが勝利してからというものの、
何かにつけて亜里沙は俺に絡んでくるようになった。

（初めての対戦訓練で、しかもいきなり女子相手だったからどうしていいか分からなくて、とりあえず武器全部叩き落としてギブアップさせたんだよな……。
後から亜里沙たちが学年トップ候補筆頭だったって聞いた時には驚いたもんだ……ゲームセット・ブザーが鳴った時の亜里沙は思い出すだけで恐ろしい）

般若だった。奥歯を噛み締めて「こいつ殺してやりたいですわ」って視線で語ってたもんなあ。
亜里沙としては自分たちの勝利を信じて疑っていなかっただろうし、手加減されて、しかも負けたことに本気で怒っていたんだろうと思う。

ずるずると足を引きずりながら牧伏が歩き始めたのを確認してから、俺はやや早足気味の亜里沙の隣に並ぶ。
そこで亜里沙の頬が赤らんでいるのに気づいた。

「あれ？亜里沙、なんか顔赤くないか？まさか、さっきの訓練で顔面擦りむいてたり……」

「夕日！夕日のせいですわ！」

「そうか？それにしては赤すぎる気もするんだが……」

「ちょ、ちょっと！あまり不躾に眺め回さないでくださいな！？……

……恥ずかしい、ですわ」

「うお、あ、悪い」

亜里沙は語尾をごにょごにょと濁し、ぷいとそっぽを向いてしまう。最後は良く聞こえなかったが、顔をしげしげと眺められたら、それは誰だって気分の良いものではないだろう。

「そういや亜里沙、今日は何でまた対人訓練に参加してたんだ？ようやく完成した専用機の稼動試験が忙しくてどうこう――ってこの前言ってなかったか？」

話題を変えるべく話しかける。

亜里沙はこのところ講義が終わり次第、すぐに学園の敷地内にある軍のラボに向かい新型ＡＤの調整と試験稼動をしていた。

テスターとしての活動の結果、出揃ったデータを元に開発が進められていた彼女の専用機の配備は間近と聞いている。

なのに今日の対人訓練に参加していたのが少しばかり気になったのだ。

「わたくしの専用機――『アメノウズメ』の調整は昨日で終了しましたの。今日はメンテで、明日の最終稼動試験後に正式に私の専用機として配備されますわ。

ですから今日は特に用事がなかったのですが、牧伏さんから対人訓練に誘われましたの。気分転換に良いかと思いまして、参加させていただいた次第ですわ」

と、後方の牧伏から声が飛んでくる。

「なーにが気分転換に良いかと思いましてー、だっつーのよ。散々

『面倒ですわ』とか『連日の稼動試験で疲れてますの』なんて言ってた癖に、
対戦相手が拓人だって教えた途端に手のひらひっくり返して参加するって食いついてきたくせによう……」

「ち、違っ！――ええい、お黙りなさい、この！この！」

「あっぶねえ！おうわーッ！モノを、投げんじゃ、ねえっつーのよ！あでっ、痛え！痛えって！」

「お前ら毎度楽しそうだなー……」

カバンの中から次々と物を出しては投げつけ、果ては道端の石ころを投擲する亜里沙と、ひたすらにそれを回避する牧伏を眺めつつ、ぼそりと漏らす。
いつもの光景ながら飽きることがない。亜里沙は怒るととにかく暴力的になる。
モノをぶん投げてくることが特に多い傾向にある気がする。
これはこれで動体視力の訓練になるかもしれない。ならないか。ならないな。

「阿呆なことを言うその口に石でも詰め込んでやりたい気分ですわ……はあ、無駄な汗を掻きましたわ。早くシャワーを浴びたいですわね」

一通り気が済んだのだろう亜里沙が肩で息をしつつ言う。
対して牧伏は投げつけられた物品の回収をしている。これもいつもの光景だ。
普通投げた側が片付けるのが道理のように思うが、亜里沙にそれを言うと暴力度が加速するので俺も牧伏も大人しく片づけを行うこと

にしている。
手伝いもしないが一人で歩き去りもしないあたりは気遣いなのか、ただ傲慢なだけなのかは判断に困るところではあるのだが。
「しっかしアレだよなあ。亜里沙も亜里沙なら拓人も大概鈍いっていうかよう。普通気付きそうなもんだがねえ……」
「あ？何か言ったか？」
亜里沙から隠れるようにして牧伏がボソボソと言っている。
何だか気の毒そうなヤツを見る目でこちらを見ているのは何故だろう。
「別になんもしてねー。単に天下の拓人にも欠点は有るんだなとかよう。……あー、やきもきするねえ」
「やきもきって何の事だよ？」
「それが分からねえから欠点だって言ってるんだっての。オメーは本当に――ああもう！」
ボリボリと頭を掻き毟って、そこではたと牧伏は動きを止めた。
そして顔を上げたかと思うと、俺と亜里沙を交互に見て、にやりという擬音がしっくりくる表情になり、
「あー、しまったぜー。教室に忘れ物しちまったー」
酷い棒読みでそう言った。
「「……は？」」

俺と亜里沙の声がシンクロした。
牧伏は怪訝そうにしている亜里沙へと近寄り、身を屈めて何事かをつぶやいた。

「……拓人と二人きりで……俺様はこのまま……」

「……え？……ちょ、ちょっと待ちなさい！そんな急に、そもそもわたくしは！」

「……アイツ……だからよう……拓人だって……」

亜里沙の顔色がみるみるうちに赤く染まっていく。
何故かちらりと俺を見て、目が合うと動揺した様子で全力で顔を逸らす。
そんな亜里沙の方をぽんと叩き、牧伏はこちらに視線を向けた。

「って言うわけで俺様はちょっくら学校に戻るから、先に帰っててくれ！んじゃなー！」

呆気に取られているうちに、牧伏は学校へ掛け戻っていく。
と、牧伏は立ち止まり、気味の悪い笑顔で手を振り一言。

「うまくやるんだぜ亜里沙ー！」

「大きなお世話ですのよ――ッ！」

もはや通行の邪魔だとかいう言動とは程遠い大声で、亜里沙は叫び返した。

3話（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

4話

沈みかけた太陽からの朱色の光に照らし出されて、寮へと続く道に揺れる二人分の影。

一方は暢気にマイペースで進んでゆく。
もう一方は片割れの影へと微妙に近寄ったかと思うと、慌てて少し離れ、しかし再びじりじりと接近してゆく。

それを何度も繰り返す。
これを見ている者が他に居れば、思うことは恐らく「じれったい」に他ならないだろう。

じれったさに耐えられずにお節介を焼いた牧伏により、こんな状況に陥りつつも歩いてゆくのは――拓人と亜里沙の二人連れだ。

（ああもう、陥った、なんて……！突然あんなこと言われても心の準備が出来ていないですのに……！）

去り際に牧伏が言っていた言葉に冷静さを欠いている自分が情けない。

（けれどもチャンスなのは確かですわ、などと思ってしまう自分はひょっとして乗せられてるんでしょうか）

ぐるぐると巡る思考はちっともまとまる気配を見せない。
ちら、と隣の拓人を伺うも、ゆっくりと隣を行く拓人は、特に何を考える様子もなく前を向いている。

本当にこの男は人の気も知らずとは思うものの、確かにコレでは牧伏の言葉通りなのかもしれない。

『オメー、そろそろ拓人に告っちまえよう。今日は拓人と二人きりで帰れるようにしてやっから。
俺様はこのままどっかに行くからよう、頑張っていいムードまで持っていくといいぜ』

『つーかアイツの鈍感レベルは本気でどっかの漫画の主人公レベルだからよう。
言ってやんなきゃ絶対に気付かねえと思うがなあ。
拓人だってオメーから告白されたら悪い気はしねえだろうしよう』

牧伏がこんなことを言ってくるのも仕方なく思う。
そもそも自分が拓人に好意を持っているのは同学年では周知の事実――遺憾ながら――なので、自分たちの関係の発展を期待するのも理解できる。
暁学園が軍事関係に力を入れているとはいえ、そこに通っているのは高校生な訳で、この手の話題は殊更に興味を惹く。

その話題が機甲科（わたくし）主席と普通科（たくと）主席の恋愛話であれば尚更話題は早く広まる。
今のところは「亜里沙が拓人に片思いをしている」という微妙に悔しいものなのだが。
これも1年近く続く話題なので、そろそろ周囲も新たな局面を迎え

ることを望みだしている傾向がある。
とはいえ自分から告白するのも負けた気がするので癪だ。
どちらかと言えば男性からアプローチして欲しいと亜里沙は思うのであった。

「……あの馬鹿（まきふし）は本当に……」

「アイツの行動が意味分からねーときがあるのはいつもの事だろ？……そういえばまだ聞いてなかったけど、アメノウズメのアビリティって何なんだ？」

微妙に噛み合ってない返事を拓人が返してくる。
意味を分かってないのは貴方も同じですの、という言葉が出かけて慌てて引っ込める。
ここで噛み付いてもどうしようもない。

「……どうせ今度のお披露目で分かるのでバラしてしまいますけれど。アメノウズメのアビリティは、『リフレクション・アート』ですわ」

「リフレクション・アート？具体的にはどんなもんなんだ、それ？」

「アメノウズメは中距離戦を想定されているＡＤなんですの。主兵装は各所に装備された多連装粒子集約砲（ビームキャノン）。
ここから打ち出されたビームのベクトルを自在に操るアビリティ。
これがリフレクション・アートですわ」

「それっておい……」

拓人が驚きを浮かべる。
それを見て少しだけ得意な気持ちになる。
「ええ、つまりはアメノウズメの放つビームはわたくしの思うがまま、自由な軌道を描くことができるのですわ」
「常に相手の死角からの射撃が可能なアビリティか……。流石亜里沙のＡＤ、中々凶悪な兵装だよな」
「……もしかして喧嘩売ってますの？」
「ああいや違う違う！！演算とかが果てしなく大変そうなアビリティだと思っただけだ！だから睨むな！」
「ふん。今回は大目に見てあげますが、次に挑発してきたら怒りますわよ」
「お、おう。気をつけるよ」

その後もアメノウズメの性能についてや、その実運用に伴っての問題点など、およそ色恋とは関係ない話を続けながら歩く。
ムードなんて欠片も有りはしない会話なのだけれど、不思議と楽しい。
ＡＤに関しては拓人の知識量は豊富で、此方の意図が完璧に伝わり、テンポの良いやりとりが出来るのが原因だろうと思う。
それに、ＡＤの話をしている拓人は本当にウキウキとしている。

この笑顔を見るたび、トクンと胸が疼く。

（ああ……そういえばあれから1年なんですのね……）

ふと思い返す。
偶然に彼がここへ編入してきた理由を知り、同時に惹かれだしたのも、1年前――こうして二人で寮へ歩いて行く道筋の中ではなかったか――。

「――亜里沙」

「……はい？」

追想に耽り始めかけたところを、拓人の声に呼び戻される。
いつのまにか携帯電話を取り出し、画面を眺めていた拓人が、どこか呆然した様子でいる。

「悪い、ちょっと和葉さんから呼び出しがかかったんでラボまで行ってくる」

「ラボへ？どうしてまた……もしかしてアレですの！？」

「ああ、どうやら起動したらしい」

「それは……！」

拓人が暁学園に編入してきた理由に、大きな動きがあったのだ。

5話

奥羽社。
この名前を聞いた人間がまず初めに思い浮かべるのは、そこに所属する一人の科学者だろう。

アラガネ。

世界にその名を知られたＡＤ開発の第一人者である。
そして次に奥羽社自体の大きさを思い出すだろう。
１９９９年時点で既に日本が世界に誇る一大企業であった奥羽社だが、ラグナロク後に急激に業績を伸ばし、現在では世界有数の化物企業に成長している。
それも当然と言うべきか。
ＡＤに使われている技術は様々な分野での当時最先端のテクノロジーを二歩も三歩も飛び越しており、それらを売り物とする奥羽社の成長スピードは並々ならず。
ＡＤを介して軍部と深い繋がりを持つようになり。
やがていくつもの有力企業を合併し取り込んだ奥羽社は正に世界企業と言って差し支えない。

しかし、ことＡＤ分野に限って言えば、近年名前を知られつつ有る二人の技術者が奥羽社に所属している。

佐伯正和（さえきまさかず）。

佐伯和葉（さえきかずは）。

今年で２０歳を迎える彼らは二人は双子の兄妹で、その両者ともがＡＤ開発に携わっている。
ただ、その業務に対する役割は全く異なる。
兄の正和が世界を飛び回り、至る所の研究者と共に様々な技術交換を行うのに対し、妹の和葉は自らの研究所（ラボ）に篭もり黙々と自分の興味が向いた研究を黙々と続けている。
正和が技術をかき集め、和葉がそれらに自分のアイデアを加えモノを完成させる。
それが彼らのスタンスである。
ただ、和葉にはひきこもりの気があり、積極的に自らの研究所から出てこようとしない。

そんな佐伯和葉の研究所が、他でもない暁学園にほど近い郊外に在った。
その研究所でも奥まった建物の一室、そこで拓人と和葉は向き合っていた。
正面には大小あらゆる機器が並び、各ディスプレイには機器らがモニタリングしているモノの数値が踊っている。
機器から伸ばされたコードは部屋の中央に鎮座している機械人形に繋がっている――赤黒い異形のＡＤだ。
それを知っている者がこの場に居たら目を見張ったことだろう。
何故ならそれは、１０年前に東京に現れた「鬼」と呼ばれる機体なのだから。

「和葉さん、もう一度聞いてもいいですか……？」

「……いいよ、たっくん」

「どうやって、ここ数年どうやっても動かなくなったコイツを起動させたんですか」

「……わかんない。勝手に動き出した。それよりお腹減った。ご飯ちょうだい」

「それで、なんでコイツはまた起動しなくなったんですか」

「……わかんない。起動したけど、すぐにまた動かなくなった。ご飯ちょうだい」

拓人は頭痛を覚える。

目の前にいるこの人は紛れもなく、奥羽社のＡＤ開発部門のアラガネに次ぐ実力を持っている技術者だ。

例え見た目が何を考えているか分からない無表情――単にボーっとした女性であっても。

その知識たるや並の技術者とは比べ物にならない研究者であり技術者である。

なのに彼女が分からないとは一体どういう事なのか、とか、ご飯ちょうだいってそういう状況じゃねえだろとか考えてしまっても非はあるまい。

そも彼女しか頼れない事情があり、解決出来るのが彼女しか居ない以上、拓人としては期待をする他ない。

なお、拓人が敬語なのは、相手が年上で有る以上は多少アレな人物でも敬意を払おうという気持ちからだ。そろそろ限界だったが。

「モニタリングのログはどうなってるんです？何か兆候みたいなものはなかったんですか？」

「……勝手に動き出したとしか言えない。最近この子いじるのにも

飽きてたから、なんにもしてない。たっくん、ご飯」

「たっくんって呼ぶのいい加減やめませんか。つーか飽きてたって和葉さん！！」

「……うー。声大きい」

「久住さん、佐伯さんは近頃わたくしのアメノウズメの最終調整に掛かりっ切りだったのですわ。此方の方に気が向かなかったのもそのせいで……」

今まで拓人の後ろで様子を見守っていた亜里沙がおずおずと切り出した。

この状況には和葉だけでなく、自分にも責任の一端があると思わずにはいられなかったのだ。

そう、和葉は拓人の目的を叶えられる人物であると同時に、亜里沙の専用機（アメノウズメ）の開発責任者でもあった。

部外者立ち入り厳禁の研究所に入れるのもそのお陰である。

尤も亜里沙が拓人の目的を知っている人物であるのも大きな理由ではあろうが。

「うん、まあ、それはそうなんだろうが……」

「……たっくん、ご飯」

「まだ言うか！」

「……」

「無言で見つめてもダメだからな！」

「……たっくんのいじわる。じゃあ亜里沙ちゃん、ご飯ちょうだい」
「分かりましたわ……。その前に佐伯さん、起動理由が分からないとはいえ、仮説くらいはあるんですわよね？それを説明してからご飯にしましょう。そうでないと久住さんが納得しませんわ」
「……うん。あるには、ある」
「じゃあ、」
最初からそれを教えてくれ、と言おうとして拓人は言い噤む。
和葉が此方をじっと見つめていることに気づいたのだ。
「……たっくん、今から話すのは仮説。焦って暴走したりしないこと。いい？」
「……はい、分かりました」
どうにか拓人は落ち着きを取り戻す。
「……いい子いい子。これを見て」
和葉は一台のＰＣ端末に手を伸ばし、キーボードを操作する。
ディスプレイに画像が表示され、大きく破損した赤黒い機体が表示される。
「鬼」と言われる機体の各所は、所々虫食いのように削れ、胸に当たる部分には抉り取られたような痕が見て取れる。
機体は胸部と右半身側に集中して破損している。
腕部は肩を残しグシャグシャに潰れ、脇腹部分も装甲が剥がれ、内

骨格が露出している。
画像の端には『２００８．１１．０３』と有る。この写真が撮られた日付である。
苦々しい表情でそれを見る拓人に、和葉は続ける。
亜里沙は居た堪れない気持ちになる。
これが拓人が此処に居る理由であり、出来れば彼にとっては思い出したくないことであるだろうから。

「……まず」

すう、と大きく息を吸い込むのは、長い話をするときの和葉の癖だ。

「……ＡＤの身体機甲における最重要機構、『核（コア）』。かろうじて維持機能だけは残ってたけど、これが破損したこの子は、たっくんとのリンクが出来なくなった」

カチッ。
和葉が画像を次のものに切り替える。
『２００９．０１．２２』。機体は以前の画像とは違い、完全に修復されている。

「……装甲部分の破損した部分は修復を完了。ただし、同じく修復されたこの子のコアは外部に一切の反応を示さなくなった」

画面が変わる。
２００９．０１．２２から今日に至るまでの日付が並び、様々な方面からのアプローチの記録がなされている。
しかし、その結果の欄にあるのは全てが『起動せず』という文面だった。

「……最初は、コアの修復にミスがあるんだろうって思った。次にコアとのリンクの確立時にトラブルがあるんだと思った」

けど、と和葉は続けた。

「……両方とも違った。そもそもエネルギーを供給しても起動すらしないのがおかしかった。

なにより、たっくんのナノマシンが”ＡＤとリンク状態のまま”で有ることが考えられなかった」

ＡＤの操縦者は、ＡＤを動かす際にコアを介して『脳』と『身体機甲』をリンクさせる。

コアからの介入でナノマシンは活性化し、操縦者の脳の普段使われていない部分を刺激する。

これにより思考の加速や身体能力のリミッターを外し、操縦者自身のスペックを底上げすると共に、選者居能力部分での機体制御の演算を可能にする。

この演算結果を受け取り、機体制御を実際に行うのがコアである。

つまりはＡＤ操縦者の第二の脳たる機構がコアということになる。

拓人の身体能力が異常とも言えるのはそのせいだ。

本来ＡＤ搭乗時のみ活動するナノマシンが常に起動し、脳のリミッターが半ば外れた状態――本来セーブされているべきレベルでの行動が可能になっている。

これは佐伯兄妹を始め、基本的には一部の人物しか知らない情報だ。

ひょんなことからそれを知った亜里沙などが特別なのであり、例えば牧伏や他の学園生には知られていない。

「……たっくんのナノマシンが活性化状態を維持してる以上、この子を起こさないとたっくんは二度とＡＤに乗れなくなる」

覚えてる？と和葉が亜里沙に尋ねる。
拓人に訊かなかったのは、彼にとってそれは訊かれるまでのないことだからだ。

「久住さんのナノマシンがこの機体のコアからの始動コマンドで活性化を始めた以上、同じコアの終了コマンドで活性化を終えさせないと他のコアとのリンクも出来ないんでしたわよね。
ＡＤはナノマシンの起動時に機体との適合をするという特徴故に」

「……正解。だから迂闊にこの子を弄れなかった。それにこの子はアラガネの作ったワンオフ機。この子に限らず原点（オリジン）のＡＤはブラックボックスが多すぎ」

和葉はアラガネに対し敬称を付けなかった。
どころかアラガネと口に出すとき、彼女にしては非常に珍しく、声のトーンが下がっていた。

「原点（オリジン）のＡＤ……。アラガネ博士の作ったラグナロクの騎士ですわよね」

「……うん。全部で１３体作られたオリジンは、全部に解析できないブラックボックスが積んである」

――あの日（ラグナロク）。
世界中に蔓延った悪魔と世界樹を討ち滅ぼした１３体のＡＤ。
これを人々は原点（オリジン）のＡＤと呼んでいる。
オリジンの内、現在も活動しているのは９体。
そのどれもが世界各地での魔物との戦いを続けている。
１０年が経過した今でも、どんな騎甲（ナイト）者、機甲（ポーン）者が駆るＡＤもオリ

ジンに匹敵する戦力を有さないとされている。
当然それは他の誰よりも長く戦っているオリジンの乗り手の技量にも寄るものだが、
大きな要素としてオリジンに積まれたブラックボックスに秘密があるとされている。

現在は活動していない４体の内の一体――それが目の前にある『鬼』。
改めて告げられた事実に、亜里沙は唾を飲み込んだ。

「何が作用してるか分からないまま、コアに手を入れてしまうことは出来ませんものね……」

「……うん。だけど、これを見て」

再度画面が切り替わる。
折れ線グラフだ。
下には今日までの日付があり、数値は今日に至り急激に上昇している。
それ以前の日付では所々で少々上がり、あとは無反応を示す最底辺を這っていた。

「これは？」

拓人が口を開く。
このグラフは今まで見たことのないデータだった。

「……脳波データ」

「脳、波？」

「……仮説の結論から言う。この子は」

和葉は一旦区り、言う。

「……この子は今まで眠ってた。あの日からずっと、『夢』を見てる」

それがどういう意味なのか拓人が問おうとしたとき――。

「……なんだ！？」

研究所に爆音が轟いた。

5話（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
毎時０時に更新をしていましたが、都合により早めに更新します。
よろしくお願いします。

6話

時間は少し遡る。

拓人と亜里沙を二人きりにした後、牧伏は一人、街へと繰り出していた。

勿論、教室に忘れ物などしておらず、そのまま直行で学園の敷地から出ていた。

胃袋が空腹を訴えるので、寮に帰る前に間食でもしていくつもりだった。

飲食店の類は駅の方に集中している。

単に腹を満たそうと思うなら寮の食堂に直行すればいいだけなのだが、いま寮へ向かえば拓人と亜里沙に出会ってしまうことも考えられる。

それでは亜里沙をけしかけた意味がないので、こうして牧伏は一人、駅方面へ向かっているのであった。

「こうでもしねーとあいつら進展しねーだろうしなあ」

牧伏は独りごちる。

同学年でも特に優秀な二人の友人は、成績こそ飛び抜けて良いが、どうにも恋愛方面が苦手なように見える。

あれだけ分かりやすく亜里沙が反応していても、拓人はそれに気づいた様子もない。

確かに気のおけない友人としては見ているのだろうが、何分それ以

上に踏み込むところがないのだ。
亜里沙は亜里沙で変にプライドがあるようで、俗にいうツンデレ状態で意固地になっている部分がある。
そんな二人を近くから見ている身としては、どっちつかずの曖昧な状況というのはモヤモヤとして居心地が悪い。
自分自身が恋愛方面に聡いわけでもないので、そういった環境に一刻も早くケリを付けたいと牧伏は思うのだった。

「どうせならお互いに幸せってのがいいんだろうしよう」

とはいえ牧伏とて、拓人と亜里沙が上手く行かず、関係がこじれることは本意ではない。
拓人と亜里沙と自分。この3人でつるむのは結構気に入っているのだ。

学園を出て10分も歩けば飲食店街に辿り着く。
表通りには洒落たカフェや家族連れ向きのファミリーレストランが立ち並んでいるが、牧伏はそこから外れた路地に入っていく。
やや寂れたような店の数々が並ぶのは、暁学園が建設される以前からの店が軒を並べる旧商店街だ。
表通りほど人通りは多く無いが、こちらにもそれなりの人通りがある。
多くは仕事帰りのサラリーマンだが、ちらほらと学生の姿が見える。
地元住民から「裏道（うらみち）」の愛称で呼ばれるそこには様々な個人商店が営まれている。
昭和の風景という表現がしっくりくる通りだ。

暁学園が建設されて8年が経つが、その際に行われた市街の大改造によって、それまでの町のメインストリートだった所とは別に、駅

までの真っ直ぐな道が整備された。
これが表通りである。
しかし、裏通りとなった「裏道」が存在意義を無くしたわけでもなく、鮮度のいい食料品が欲しいときだとか、安くて美味いものを食べたいときときには裏道のほうが都合がいい。
この辺りは上手く住み分けが出来ているのであった。

そんな裏道に店を構えている「五番星」というラーメン屋が牧伏のお気に入りだった。
何せそもそもの値段が安い上、大盛りにしても追加料金が発生しない。
懐事情のあまり良くない学園生には大人気の店である。

牧伏は日に焼けて変色した暖簾をくぐり、厨房に向けて声を上げた。

「うーっす！おっちゃん、五番星ラーメン肉大目で！」

奥で麺の湯切りをしていた店主が、牧伏の注文にサムズアップで答えを返す。
あまり喋らない店主だがノリは良い。

「お、マッキーも来たんだ。やっほー」

「んが？おお、シダケンじゃねーか」

「そのアダ名やめてよ！すげームカつく！」

五番星の手前のカウンターでハフハフと麺を啜っていた暁学園の学生服に身を包む女生徒から声がかかる。
相変わらず女子高生ならぬ場所に居やがる、と思いつつも彼女の隣

に腰掛けた。
明るめのブラウンに染まったセミショートの奥からじとりと睨めつけてくるのは、機甲科3年の四岳ケイだ。
「まったく誰がシダケンよ……。こんな可愛い子を捕まえといてさ、失礼千万じゃない？」
「一人でラーメン屋に来るおっさんじみた女子には分相応だと思うんだがなあ。俺様的には」
「あはは、それもそうかもねー。だけど一日学校で学んでお腹減った！これは食わずには居られまいよ！」
「俺様が言えたことじゃねーけどよう。体重とか気にならんのかお前」
「んー、べっつにー？昔っから食べても太らん体質だしねー。亜里沙なんかはあの抜群のプロポーション維持するのに地味に苦労してるみたいだけどね」
クククあたしが奴に優越感を持てる唯一の部分よ、と言ってケイはズビズバーと音を立てつつ麺を流しこんでいく。
あまりにも年頃の女子に相応しくない豪快な食べっぷりだ。
拓人や亜里沙、牧伏の共通の友人であるケイはあまり女子という体面を気にしない。
女の子女の子しないと言えばいいだろうか。
闊達な気性の持ち主である彼女は、その親しみ易さから男女の隔て無く友人が多い。
そんな彼女の悩みは成長の兆しも見えない自身のスタイルだとか。
どの部分かの名言は彼女の名誉のために明言はしない。

「はふー……ウマー。そういやマッキー、亜里沙とそのカレシ候補は一緒じゃないの？」

「フフ、アイツらなら二人っきりにしてきたぜ」

「ほほう、そいつは気になりますな」

邪悪な笑みを浮かべるケイに、同じ穴のなんとやらと牧伏は亜里沙をけしかけてきた経緯を伝える。
亜里沙の親友を自称するケイも例の二人の発展を望むクチだ。
近所のおばちゃん的なお節介な気持ちで応援している感が否めないが。

「あーいうツンデレちゃんな亜里沙見てるのも楽しいんだけどねー」

「それには同意するけどよう」

そうして二人が越後屋と悪代官の気分で話しているうち、牧伏が注文していた五番星ラーメンが出てきた。
店主のおっちゃんのサムズアップ付きで。どうやら店主の個人的ヒットだったらしい。

同じくサムズアップでそれに応え、とりあえず牧伏は五番星ラーメンをズビズバーと飲み込む作業に移ったのであった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊

「げふう」

「ちょっとやめてよ、気持ち悪いなぁ」

「おお、悪い悪い。つい、なあ」

満腹になった腹をさすりながら、五番星の暖簾をくぐり、牧伏とケイは外に出る。

周囲はわずかに薄暗くなりつつあるが、まだまだ暗いという程でもない。

一番星でも見えないかと空を見上げて、ケイはそれに気づいた。

「……あれ、何だろうね？」

「んあ？」

ケイが空を指差す。

牧伏がそれを追いかけると、ゆらゆらと頼りなく飛ぶ飛行機が目に入った。

それを見、牧伏は空を渡る輸送機に違和感を覚えた。

微妙に機体がブレて見える。こんな事があるのだろうか。

訝しく思いつつも、ケイの疑問に答える。

「んー？ありゃー確か、最近新造された空軍の……コウノトリ、とかいう機体だったかあ？
随分低く飛んでるもんだな……。
……つーか、あんなに揺れて大丈夫なのかね。落ちるかもな」

四角い顔を上に向けながら、牧伏はじっと眼を凝らす。
牧伏の目は良い。視力も２．０を超えている。なにせ牧伏は空軍のパイロット志望だ。
機体整備の腕も良く、この成績の良さがここにくる手がかりとなっているのだ。
その牧伏が『落ちるかも』というのだから、相当に危険な状況なのだろうとケイは思う。

「あ」

「煙噴出しちゃったなあ……危ねぇ、落ちるぞありゃあ！！逃げるぞシダケン！！」

輸送機が空中で黒煙をあげ、みるみるうちに降下を始めた。
地上に数秒送れて、派手な爆発音が轟いた。
見ると結構な大きさのコンテナが数個、ばらばらと輸送機から落ちてきている。
コンテナは直下する事無く、パラシュートと底部の小型推進装置でゆっくりと降下している。

と、黒い影が崩壊の一途を辿る輸送機に突っ込んでいった。

それに衝突された輸送機は、今度こそ墜落の様相を呈し、高度をぐんぐんと下げる。

機体から外れた部品の破片が降り注いでくる。ひとつでも当たれば大怪我は免れない。

しかし、ケイの視線は突っ込んでいったものに釘付けになっていた。

「おい、どうしたシダケン！破片にぶつかったら痛ぇーじゃすまねえぞ！」

立ち尽くすケイをぐいと引っ張り、牧伏は声を荒げた。

辺りでも騒ぎが起こっており、裏道にいた人々は一目散に逃げていく。

恐慌にこそ陥っては居ないが、皆、驚愕と恐れを貼りつけた顔でその場から離れようとしている。

ケイは呟いた。

「あれ……魔物（デーモン）だよね……？」

堕ちていく輸送機を追いかけていくのは、魔物、人類の敵である悪魔だった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊

「こちら、奥羽社ＡＤ特務第０３隊所属ルナ・アサウ及び同隊所属キラハ・ボルドウィン。任務遂行中に魔物一体に遭遇。搭乗していた輸送機は大破。輸送品は全機射出完了。未確認につき情報不足ですが、襲撃方法とＡＤの算出データから見て対象は下位の飛行型魔物（フライトデーモン）と予測。これより本機ホワイト・ラビットとボルドウィン機ヘヴィー・スカーレットは起動、魔物の撃破を行います。許可を要求します」

「許可します。ただし荷物の安全は確保すること。魔物を倒すことが出来てもあれに何か有ったんじゃ意味が無いからね。最悪、魔物は無視して荷物だけ安全区域まで運び出す事。あー、あと周り気をつけてね。奥羽社の研究施設がその辺にあるから」

「任務了解。作戦開始」

コンソールを操作し司令部との通信を遮断して、今度は別の回線を開く。
少しだけ窮屈な場所（コックピット）にいるルナの顔を、真正面のメインウィンドウが明るく照らす。
青白い光が、彼女の流麗な容姿を淡く滑らかに、冷たくつたう。
「分かったわね、キラハ。私達の最優先事項は荷物の安全確保。魔物との戦闘は臨機応変に。周囲への被害は最小限に抑えること。何

か質問は？」

回線の向こうにいるキラハは、なにやらごそごそやっている。
ノイズ混じりの通信が、耳障りな音を奏でている。

「……どうしたの？キラハ応答して」

『えーとぉ、なんか機体との同調率が凄く悪いんだよぉ。なんとびっくり５８パーセント！
これじゃあ通常戦闘なんてとてもじゃないけど無理～～～』

「はあ……？何かの間違いじゃないの。同調測定やり直してみた？」

『うん、もう何回も試してる。起動エラーかと思って再起動もしてみたんだけどねぇ。
というか、同調率がどんどん下がってくるんだけどぉ。
このままだと完全沈黙まであと１０分ちょっと。それで無くとも７分も経てば動けなくなるかもぉ』

「役立たず。まあ、いいわ。５分でケリをつける。アンタは後方支援に回って。
どうせ、アンタのヘヴィー・スカーレットじゃ周囲に被害を出さない戦闘は不向き」

『りょーかい。じゃあルナ、お互い無理はしませんように』

輸送機から落ちたコンテナの内、二つが不規則に鳴動し、中に格納しているモノが動き出したことを示す。

やがて、コンテナは解れるようにして分解していき、それらの姿を晒した。

「ＡＤ（エクゼック・エンゼルドレス）、起動」

白と青に彩られた甲冑に身を包んだ騎士と、濁った赤の重騎士――機械人形（エンゼルドレス）が姿を現す。

「行くわよ、キラハ」

『ういー！』

――ＡＤを駆る少女たちの戦いが始まろうとしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0265u/

終末ロデオドライブ

2011年7月1日03時43分発行